

第5回 デュエットの相手は 橋幸夫から三田明へ

戦後のデュエット・ソングは『リングの唄』を並木路子と霧島昇が一緒に歌ったことから始まり、藤山一郎と奈良光枝による『青い山脈』の爆発的ヒットなど、多くのデュエット曲が誕生しましたが、当時、霧島にしても藤山にしても30代の既婚者、奈良光枝もすでに人妻でした。

ということ、若さあふれる青春スターがデュエットで青春を謳歌するのは、昭和37年の『いつでも夢を』からと断言してもいいでしょう。

吉永小百合はこの曲以降も、昭和41年まで橋幸夫とのデュエット曲を5曲リリースしていますが、私のお気に入りには、2枚目のデュエット曲、映画の主題歌でもあった『若い東京の屋根の下』です。

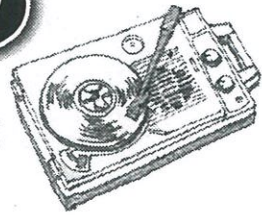
でも、それ以上に口ずさんでいたのは、三田明とのデュエット曲『若い二人の心斎橋』でした。吉田正門下では、橋幸夫の弟分に当たる三田明が、「次は僕とご一緒に」とばかりに小百合ちゃんとのデュエットに臨みました。

昭和39年10月発売ということは、オリンピックで東京の街が五輪一色だったとき、作詞の佐伯孝夫はラブ

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



ソングの舞台をあえて大阪に定めたことになりませう。

「淡い光の橋の上 ここなら誰も邪魔などしない」と歌われた心斎橋。思春期を迎えていた筆者にとって、それは実に魅力的なデート風景であり、「心斎橋」という名は美しく脳裏に刻まれ、東京の日本橋や数寄屋橋以上にあこがれのスポットになりました。

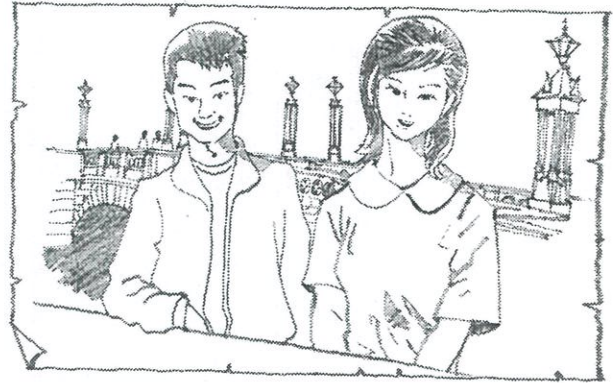
しかし、6年後に初めて訪れた心斎橋の下に、水の流れはありませんでした。歌が発表されたときには、すでに長堀川は埋め立てられていたようなので、大阪を知らない人の中には佐伯孝夫のトリックに見事にはまってしまった人も多かったことでしょう。

この歌が発売される4か月前、同じビクター所属の田辺靖雄が『二人の星をさがそうよ』（『若い二人の心斎橋』と同じ、佐伯・吉田コンビ）をヒットさせますが、サビの部分の旋律が好きだったので、類似したメロディーが

聞かれる『若い二人の心斎橋』が気に入りになったのは自然の成り行きでした。

小百合ちゃんより3学年下の三田明でしたが、デビュー後一年を経過し、アイドル歌手として絶頂を迎えようとしていたときでしたから、スター女優の小百合姉さんとのデュエットも自然の成り行きだったと思います。

ただし、シングル盤のジャケットには「新しい魅力のコンビで唄う吉永小百合／三田明」と、橋幸夫のときは反対に、吉永小百合の名前が先にデザインされています。



好評に恵まれて、翌40年4月には再び吉永・三田コンビで『明日は咲こう花咲こう』のデュエット・ソングがリリースされます。梶光夫らがレコード化して、当時広く歌われていた『可愛いあの娘』を思わせる軽快な曲調で、夏休みには吉永主演で映画化され、三田も同名役で出演しています。

ほりい・ろくろ 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和歌謡考」』第1～3集（グスコ出版）がある。